

八中2年人権だより

徳島市 八万中学校
2年生 第22号
2024年 3月18日
編集・文責 吉成正士

(第21号からのつづき)



自分にとって成長できた1年

■僕はこの学年全体人権を通して、いろいろなことを学びました。まず水平社の人々の生き様は、僕にはとても勇気あることで、自分には絶対できないようなことでした。また誰かがコロナ差別のことを言っていました。それを聞いて僕は怖くなりました。次に本当に恥ずべきことは、差別をしてしまう環境をつくってしまうことだと思います。他に、西光万吉さんや木村真三さんなどの生き方を通して、僕は何事にも立ち向かえるようになりたいと思いました。さらに吉成先生が言っていた、「差別は夢を奪う」は、本当にそうだと僕は思いました。差別を受け、夢を奪われ、死んでいってしまうということです。「一時」の人権学習じゃなくて、学び続けることを学ぶということも印象に残っています。僕は今回の人権学習で、ほんの少しですが、みんなの前で発表をすることができました。やはり少し緊張していました。この1年間は、自分にとって成長できたかなと思っています。より人権について考えることができて良かったです。

3組AR

発表することは、皆さんにとって絶対大きな力になります。そしてその内容も、これまで伝え続けてきたことが、少しずつ皆さんのなかに降り積もっていることが分かって、嬉しい気持ちになりました。時間はかかりましたが、ようやくスタートラインに立ったのかもしれません。あとは、後ずさりするのではなく、継続することです。

自分の心に刺さった

■今回の人権学習で印象に残っているのは、「みんなと同じでなくていい」という言葉です。私は今まで人に流されやすく、「みんなと同じでないといけない」という意識が強くあって、そうでないと嫌われてしまうと思っていました。でも、「本当の自分」でないと、「本当の友達じゃない」という言葉、発表者の人が言っていて、自分の心にすごく刺さった気がしました。私は学校を転校するなど、ある程度の決断はしてきたつもりだけど、ずっと恥ずべきこ

として生きてきたものと向き合って、差別をなくすために人生をかけて立ち上がった人たちは、私の決断とは比べものにならない大きな決断をしているんだと思いました。吉成先生が言っていた「恥でもないことを恥じるとき、本当の恥となる」という言葉が、私のなかで本当にしっくりきて、恥ずべき命はないし、人と違うことを恥ずかしいと思わず、自分の芯をしっかりと持ちたいです。これからも人権学習を通して、自分と正面から向き合って、正しい知識や多様な考え方をつけるため、学び続けていこうと思います。

2組MH

「みんなと同じでないといけない」という意識は、日本人は特に強いようです。ある面では必要なことですが、不要な面にまで同じようにしようとしたり、ましてやそれを求められると、息苦しさを感じて自分が自分でなくなったり、自分を見失ったりしがちです。

「自分は自分のままでいい」そう思えることが、どれだけ自分を楽にしてくれるか。水平社のメンバーも、そう望んで立ち上がったのではないかと思います。自分の中にしっかりと「芯」を持つことです。それさえあれば、おどおどすることも、びくびくすることもあります。何物も怖がることはありません。自分が自分でいられます。そんな生き方をしてみませんか。



水平社は僕にとってのヒーロー

■間違っていると分かっているけど、多くの人に流されて一緒に差別をしてしまうのか、差別をされている相手の気持ちを思ったことがあるのか、人はなぜ自分とは違うところを差別してしまうのか、どれほどつらい思いをしたのかを、差別している方に知ってほしいです。どんな理由があっても人を差別していい理由にはなりません。「他の人がやっている。だから自分もやっていいよね。どうせバレーないし」という考えで人を痛めつけてはなりません。先生が教えてくれた先生の親の話や、生徒の親の話は言うのに、どれだけの勇気がいるのか、はかり知れません。言ってくれた先生・生徒の方には本当にありがたいと思っています。

どれだけ人は相手を傷つけても、傷ついた人の痛みを知ろうとも考えようとしません。そんな人たちがいるの

に、それを見て見ぬふりをしている人たちだけど、それは違うんじゃないかと立ち上がった水平社の皆さんは、僕はヒーローだと思いました。勇気があり、人と人が平等な立場である、それこそ平和じゃないのかなと思います。すべての命は等しく、尊いものです。軽々しく「死ぬ・殺すぞ」などは言うてはなりません。冗談でも人を蔑むことは、いつか自分に返ってきます。人は人を尊敬し合い、慈しむものです。先生がおっしゃった、「恥でもないことを恥じるとき、本当の恥となる」という言葉に、すごく僕は感動しました。やはり言葉は重いと感じました。あんなに胸を締めつけられる思いをしたのは初めてでした。だから日ごろの言葉に気をつけようと思いました。 5組FI

「恥でもないことを恥じるとき、本当の恥になる」

これは、私の言葉ではありません。これは、ハンセン病患者だったある方の言葉です。その人にとってハンセン病であることは、恥とは思えなかったのでしょうか。「同じ人間じゃないか」という、魂の叫びのような、強い思いがあったのではないかと思います。それなのに、人間扱いされない。不自由を強いられる。やはり、被差別の立場に置かれた人々の言葉は重いです。そんな言葉から学びとれることは多いです。

偉人と言われる方から学ぶことも多いでしょうが、たとえそうではなくても、有名でなくても、道端に生える雑草から学べることも多くあるのではないのでしょうか。むしろその方が、人生の本質を突いているかもしれません。



深まった、親への感謝の気持ち

■私は2年生最後の全体学習で、「他人事として考えない」ことの重要性をあらためて知り、実感しました。部落出身者の川口さんの動画を観て、今までの学習で部落の人たちが差別されていたことは知っていましたが、それでも部落の人への差別が私が思っていたよりもひどく、動画を観ている間も胸がキュツとなりました。知らない間違った教育を受けるかもしれない。嘘の噂を植えつけられるかもしれない。誤ったことを鵜呑みにしてしまうかもしれない。などの言葉が動画に出てきて、この動画は知ることの大切さも伝えたかったのかなと思いました。

そして、「父が隠した家族」の動画を観て、私は「親は背中を見せればいい」という言葉がとても心に残りました。自分の子どもと離れて暮らす木村さんや、全体学習で話してくださった吉成先生が、「親失格」と言っていますが、私はそうは思いません。離れていてもちゃんと愛し

てくれているのなら、私的にはそれで十分だと思います。人それぞれ感情は違いますが、親への気持ちを1つに絞るなら、ほとんどの人が感謝だと思います。私もこの動画を観て、親への感謝の気持ちが深まりました。私はこの全体学習で、命の大切さや差別で苦しむ人の気持ちを考えることができました。この経験をこれからに生かしていきたいと思います。 2組AK

何と言え方がいいのでしょうか。ありがとう、励ましてくれて。。いろんなことがあった私の家族です。今もそうですし、これからもそうでしょう。でも、「思う気持ち」は変わらないんです。それはみんなにもそうあってほしいなと思います。

人の営みとは、スッキリ割り切れるものではありません。「○か×か」とか、「黒か白か」ではなく、△や□もあったり、グレーやいろんな色彩があるものなのだと思います。複雑で、多様で。となれば私たちはスッキリすることはなく、周りのすべての人が、学ぶ対象であるということになります。でもそのことは面倒くさいことではなく、楽しみの一つになっていくものなのです。人を知ること、人とつながること、人と関わることを、「楽しい」と思えることで、この社会はより良くしていけるのだと思います。



父が亡くなってからこの授業までの数日間、本当に胸にポッカリ穴が開いたようでした。別れの日が近いことも分かっていたし、覚悟もしていたつもりでした。それでもやはり、分かっていたいなかったのだと思います。父との様々な記憶が思い出されては、何もする気がしなかったのです。それでも卒業式や、今回の授業がありましたから、いつも通りふるまっていました。

そして今回の授業を終えて思うのです。みんなの一生懸命な姿や発表、聴く姿。感想文を読んでいて、「励まされているな」と。皆さんにそんな意図はなかったのでしょうか、私はみんなから生きる勇気をもった気がしました。やはり思うのは、人は人と人とのつながりのなかで生かされているということです。私はこの学習をするたびに、みんなのことが好きになります。今までもそうだし、今回もそうでした。最後に濱谷先生がおっしゃいました。

「先生も負けじと頑張っていこうと思います」

人権学習は、教師とか生徒とか、大人とか子どもとか関係なく、人と人として共に学び合う時間なのです。生きる勇気を共に分かち合う時間なのだと思います。

(第23号につづく)